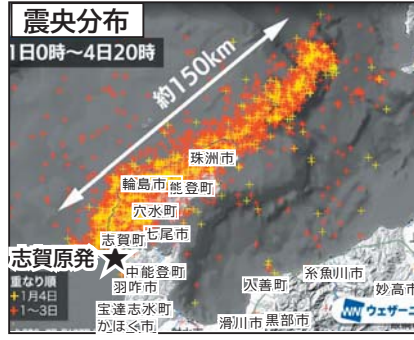


◆地震発生地点の分布
 これまで知られていなかった断層帯が明らかになった。先端にかつて珠洲原発計画があった。市民の反対運動で計画は白紙となった。もし珠洲に原発があったら日本列島が分断されていた。しかしこの断層近くに志賀原発が建ち震度7を記録。反対運動が続いている。



もし鶴彬が現在に生きていれば、能登の惨状を見てどのように向き合っただろうか

能登半島を襲った大地震



能登の道路



被災現場



輪島朝市火災現場



輪島市内



七尾市内



内灘町内



能登町内



穴水町内



「数千年に1回の現象」約4m隆起 輪島

鶴彬 通信

はばたき

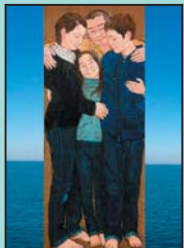
「鶴彬を顕彰する会」

第45号
 2024年5月30日
 鶴彬を顕彰する会

もくじ

- ② 総会の報告
- ③ 市民川柳祭り・鶴彬川柳大賞の作品募集
- ④ 「ダキシメルオモイ」小林憲明
- ⑤ 平川柳氏の論文
- ⑥ 吹き出しレポート 遠田勝良
- ⑦ こどものころ五・七・五 年間賞
- ⑧ 鶴彬交流の広場 平野道雄
- ⑨ 面
- ⑩ 面
- ⑪ 面
- ⑫ 面
- ⑬ 面
- ⑭ 面
- ⑮ 面
- ⑯ 面
- ⑰ 面
- ⑱ 面
- ⑲ 面
- ⑳ 編集後記

第12回高松歴史街道フェスティバル



特別企画
 画家／小林憲明氏の「ダキシメルオモイ展」

9月14日(土) ~ 16日(月)
 ◆高松・産文センター他にて
 ・鶴彬墓碑法要、碑前祭、市民川柳祭、川柳大賞など多彩な企画
 ◆詳細は20頁に



小林憲明氏／1974年新潟県出身、15歳の時レンブラントに憧れ画家の道へ。2000年名古屋美術大学研修生修了。結婚を期に家族をモデルに、家族の愛を描き、東日本大震災をきっかけに「ダキシメルオモイプロジェクト」を立ち上げ、被災者に寄り添う作品を描き続けている。

第25回 鶴彬を顕彰する会総会

総会は、令和6（2024）年一月二十四日、まちかど交流館一階で開催し、十四名が参加しました。まず平野喜之事務局長が開会、議長に遠田勝良事務局を選任しました。議事に入り、事務局長から令和4（2022）年の事業報告がありました。

令和5（2023）年度の事業報告

1. 第24回総会

1月22日（日）午後1時30分よりまちかど交流館1階で開催、前年度の事業、決算報告があり、23年度事業計画、予算を協議承認しました。

2. 第25回鶴彬をたたえる集い

（はばたき44号に記載）

① 第6回鶴彬墓碑法要の集い

9月14日（木）約30名の参加者がありました。読経の中で参加者たちが焼香を行い、続いて平野道雄浄専寺前住職による感謝がありました。

② 第24回鶴彬をたたえる集い

墓碑法要の後、場所を高松歴史公園に移して、句碑前において開催しました。参加者は約40名でした。司会は幹事の高橋成典さんで、先ず金田平夫会長の挨拶があり、親族を代表して鶴彬甥の喜多義教さんが挨拶されました。かほく市油野和一郎市長からのメッ

セージが幹事の遠田勝良さんより代読され、盛岡と大阪の仲間からも連帯のメッセージが寄せられました。続いて、遠田さんから第28回鶴彬川柳大賞の選考結果についての発表があり、高松吟詠会代表の武田求氏と浜谷義則氏が鶴彬の川柳を吟詠、最後に参加者全員による句碑献花があり、参加者全員の記念写真撮影を終え散会しました。

3. 特別展／彫刻と墨書作品展

はばたき44号の12頁に特別展について掲載されているので、詳しくはそちらをご覧ください。ですが、香川県の彫刻家である大西康彦氏と書家である樋笠幸三氏による彫刻と墨書の作品展を行うことができました。その方々とのご縁を結んでくださった七尾市の彫刻家である飯田昌史氏も彫刻を出品してくださいました。飯田氏はこの度の地震でアトリエと多くの作品が壊れてしまったそうです。また香川県の方々から「もし顕彰会が被害を受けていたら是非支援をしたい」という申し出をいただきました。

4. 第28回鶴彬川柳大賞

（はばたき42号に記載）

かほく市川柳協会から引き継ぎ8年目となりました。「現代を鋭く風刺した、新しい感覚の川柳」を募集したところ200名近くから応募作品をいただきました。選者には、鶴彬を顕彰する活動にご協力いただいている方々に選考をお願い致しました。

5. 普及活動

① 鶴彬通信「はばたき」の発行は本年度3回発行を目標に、第42号／1月20日、第43号／5月30日、第44号／11月30日に発行しました。鶴彬通信発行で、行事計画と経過報告を会員の皆様へお知らせすることが出来ました。また、ラインを使うことにより編集会議の日程もスムーズに決まるようになり、発行体制もある程度安定してきましたので、今後も企画と編集内容を充実し鶴彬を発信して行きます。

② 七塚うみつこランドで鶴彬のパネル展をすることができました。

③ 鶴彬の新しいパネルを購入することができました。

④ 8月26日に香川県丸亀市の猪熊弦一郎現代美術館のミュージアムホールにおいて開催された『鶴彬とは何者か 対談と映画を観る会』に、事務局長である平野が参加し、大西氏と樋笠氏と対談し、さらにミュージアムホールにいられた方々とも鶴彬について語り合うことができました。

⑤ 9月2日に佐高信氏に産文大ホールで鶴彬没後85年の記念講演をしていただいた。

続いて会計担当の小山広助事務局から令和5（2023）年の財政報告、高橋茂典監査委員から令和5（2023）年の会計監査報告がありました。その後、事務局長が令和6（2024）年の事業活動方針（案）について話しました。

令和6(2024)年度の事業計画

高松産業文化センターでの高松歴史街道フェスティバルの日程について、9月14～16日の3日間を予定していたのですが、9月14日は大ホールを他の団体によってすでに押さえられてしまいました。

しかし、9月14日は鶴彬の祥月命日ですので、浄専寺境内では墓前法要、高松歴史公園では鶴彬をたたえる集いが予定されていたので、行事のスケジュールにそれほど大きな影響はありません。

1. 事業活動

第12回「鶴彬のふるさと」

高松歴史街道フェスティバル

■第7回「墓碑法要の集い」

・9月14日(土)

・開会／午前10時～閉会10時30分

・会場／浄専寺

■第26回鶴彬をたたえる集い 碑前祭

・9月14日(土)

・開会／午前11時～閉会11時30分

・会場／高松歴史公園

■「能登半島地震とタキシメルオモイ展

会場／高松産業文化センターの大ホール

・9月15日(日)～9月16日(月)に開催

(詳細は次の頁をご覧ください)

■第11回「鶴彬」かほく市民川柳祭

■第29回鶴彬川柳大賞

会場／高松産業文化センターの大ホール

・9月15日(日) 午後2時～5時

・9月16日(月) 午前10時～午後5時

・入選作品を展示。

・表彰状は、市民川柳については9月15日に授与、川柳大賞については後日郵送。

・作品応募期間について

①第11回「鶴彬」かほく市民川柳

5/10～7/5

②第29回鶴彬川柳大賞

5/20～7/20

■お話&座談会

講師／小林憲明氏

会場／高松産業文化センターの大ホール

・9月16日(月)

・お話し／午後1時～2時

・座談会／午後2時10分～4時

・開会／午前11時～閉会11時30分

・会場／歴史公園

・宇部功先生の「鶴彬の川柳から学ぶ」特別授業 未定

2. 普及活動

1. 機関紙「鶴彬通信はばたき」・年3回発行

〈予定・5月・8月・12月〉

2. 資料室の充実(開設・2014・9/14)

①見学者の対応・動画を作成しSNSで発信・短い紹介ビデオ制作しガイドに利用

句碑案内説明板

②展示企画・資料の整備と充実

③運営と物販

*毎週火曜日は全館休館日・開室日時以外に見学を希望される方は事前に顕彰会事務局に連絡。物販の整備

3. 七塚うみつこランドで鶴彬のパネル展

7/23～8/4

4. 新リーフレットの作成

5. 会計の簡素化

6. 講演活動

日時／5月31日(金) 15時10分～16時45分

場所／石川県勤労者プラザ306号室

主催／人権フォーラム

顕彰会の事務局長である平野喜之が、『鶴彬の生涯』～絵本「鶴彬の生涯」と川柳を味わう～という演題で講演する。

事務局長の事業活動方針の報告に続いて、令和6(2024)年の財政予算(案)について会計担当の小山広助さんからお話がありました。

「乗り越えよう能登半島地震」を合言葉に 二つの川柳大会を成功させよう

2024年1月1日能登半島を震源とする震度七の大きな地震が引き起こされた。誰もが一瞬13年前の東日本大震災が頭をよぎる恐ろしいほどの揺れ方だった。

当初は地震の実態がはつきりしなかったが、分かるにつれて壊滅的な奥能登の姿が浮かび上がって来て胸が締め付けられる。かほく市に隣接する内灘町も地震による液状化現象で、多大な被害が出ていることから全国ニュースにしばしば映像が流されて心が痛い。復旧・復興はまだまだ遠い先には見えないう大変な中で「鶴彬のふるさと歴史街道フェスティバル」の開催を決めた。コロナ禍でも前を向いて進んで来たように、今度も負けてはいられない思いが一層強く私たちを奮い立たせているからである。

1、第11回市民川柳祭

昨年は第十回記念の市民川柳大会を盛大に行うことができた。今年は「乗り越えよう能

登半島地震」を合言葉にかほく市民川柳祭に取り組む。川柳で心をひとつに出来ればという熱い願いを込めての大会。

2、第29回鶴彬川柳大賞

昨年は鶴彬没後85年を記念しての川柳大賞だった。応募者が約200名と大変な盛り上がりを見せた。来年はまた第三十回の記念すべき年。色々と特別な企画を作成し全国発信に努めたいと思う。

鶴彬に習い現代の社会に鋭く切り込む川柳を今年も募集予定。

1と2の詳細は、次の通りです。

第11回「鶴彬」

かほく市民川柳祭・作品募集

趣旨 今年も「鶴彬を顕彰する会」が第

12回高松歴史街道フェスティバルの一環として、広くかほく市民から川柳作品を募集します。

応募資格

かほく市民及びかほく市内に勤務する方、かほく市内の小中学生と中学生。ただし小学生は五・六年生とします。

課題

一般は「声」、小・中学生は「夢」です。投句は二句以内です。

応募方法

作品募集のチラシに応募用紙が掲載されています。個人の応募は封書で応募先へ。FAXでも受け付けます。

小学生・中学生は、そこに作品、必要事項(学校名・学年)を記入し担任の先生に提出してください。

応募先

〒929-1215
かほく市高松ウ 小山広助宛、郵送

FAX 076-281-1201

メール (turnakira@yahoo.co.jp) で応募。

応募期間

2024年5月10日(金) から7月5日(金)まで。

選考

一般の部はかほく市民川柳協会、小学生の部は高松川柳会、中学生の部は七塚川柳会の合議で決定します。

発表

9月15日(日) 高松産業文化センター大ホールで発表、展示します。入賞・入選作品はフェスティバル会場に、鶴彬の句と共に行灯で展示します。

表彰

小・中学生の部とも、最優秀句一句、秀句三句、佳作五句、入選句二〇句、佳作までに賞状と副賞を授与します。

表彰式は9月15日(日)午後2時より

主催

かほく市川柳協会
鶴彬を顕彰する会

後援

かほく市教育委員会・石川県川柳協会・北陸中日新聞

第二十九回

鶴彬川柳大賞 作品募集

自由と反戦を貫いた魂の川柳作家「鶴彬」。彼の思いを受け継ぐ川柳を全国から広く募集します。

作品内容

「現代を鋭く風刺した、新しい感覚の川柳」

選者

赤池 加久 (石川県川柳協会 会長)

岩佐ダン吉 (大阪 あかつき川柳会幹事・前会長)

植竹 団扇 (東京 川柳成増吟社会長)

佐藤 岳俊 (岩手県川柳連盟顧問)

高鶴 礼子 (埼玉「ノエマ・ノエニス」主催)

遠田亀公子 (石川 かほく市川柳協会幹事)

応募規定

1 自作の未発表作品に限ります。応募資格は問いません。

2 応募用紙は自由、楷書で明確にお書きください。応募点数は一人二句以内とします。

3 二重投句、また投句後の作品の訂正、差し替えはできません。また、同一作品、酷似作品が先行して発表していた場合は、入選・入賞を辞退していただきます。

4 氏名、住所、性別、電話番号を明記してください。雅号の場合は本人名を併記。

5 作品の返却はしません。*入賞作品の使用権は主催者に帰属するものとします。

投句料 一人 金1,000円
*代金は小為替で(切手不可) 作品に同封してください。

応募期間 2024年5月20日(月) ~ 7月20日(土) 当日消印有効

選考方法 各選者の持ち点数を加算した総合計点により順位を決定します。

表彰
1 鶴彬大賞(1句)・表彰状+1万円相当の、かほく市特産品を贈呈。

2 優秀賞(3句)・表彰状+5千円相当の、かほく市特産品を贈呈。

3 佳作賞(5句)・3千円相当の、かほく市特産品を贈呈。

4 入選賞(若干)・記念品を贈呈。
発表 9月14日(土)「第26回鶴彬の集い」会場(高松歴史公園)で発表。
投句者全員に、後日入賞、入選作品の発表誌を送付いたします。

応募先 〒929-1215 石川県かほく市高松ク42番地 かほく市高松公民館・第29回「鶴彬川柳大賞」公募係宛

問合せ先
かほく市川柳協会 事務局 小山広助 気付
TEL/FAX 076-281-1201
携帯 090-4323-1754
E-mail: turakira@yahoo.co.jp

主催
鶴彬を顕彰する会
かほく市川柳協会

後援
かほく市教育委員会・かほく市文化協会
(一社)全日本川柳協会
石川県川柳協会・「和」川柳社
あかつき川柳会・川柳人社
北陸中日新聞

「鶴彰と能登半島地震とダキシメルオモイ」

小林 憲明

「鶴彰が現在に生きていたら、今回の地震をみてどう思ったでしょうか？」

今回の展示打ち合わせのとき、鶴彰を顕彰する会のスタッフに問いかけられました。

能登半島地震を受けて、暮らしている愛知



左端が小林憲明さん。他は顕彰会の事務局員で場所は産文大ホール。今年の高松歴史街道フェスティバルの展示に向けての打ち合わせ。

県渥美半島で有志を募って、渥美半島で獲れた野菜などを、ご縁があった輪島市門前町などへ支援物資として毎月届けてきました。

毎月能登半島に通っていると、地盤沈下な

どの道路の修復や、壊れた屋根へのブルーシートなどの復興は感じましたが、震災当時の崩れたままの家屋が一向に改善されない状況が、毎月通うたび目について、避難所などで暮らす避難者の方達はやるせないのだろうなと思いました。4月末には輪島市内や珠洲市を周って見て、燃えて朽ちたままの朝市の街並み、地震で傾いたり倒壊した家屋、道中の山々で見かけた山崩れの現場、自然の大き



ダキシメルオモイ展。産文大ホールもこんな感じで展示できたら。

な力を見せつけられました。

鶴彰だったらどう見えたのでしょうか？限界集落は国や行政から見捨てられているような、そうした名もなき人々へのオモイが溢れてくるのでしょうか。

今回、能登半島で被災した家族を取材して周りました。被災してもたくましくそれぞれの土地で尽力している家族、家も仕事も失って金沢近郊に二次避難された家族の食を支援している家族、諦めることなく前を向いて暮らしている人たち、それぞれの家族から能登半島に暮らす人たちのオモイへと向き合って描いてみたいと思います。



小林憲明さんの作品。背景は高松の浜と海。

投稿

十七音の川柳で戦争に抗し、
平和を訴えた川柳作家たち②

— 剣花坊・信子・鶴彬・鶴子の平和川柳 —

十八世川柳宗家・東京川柳主宰 平 川柳

べています。

発表しています。

剣花坊が明治時代に創刊した柳樽寺川柳会の機関誌は1929（昭和4）年6月には通巻200号を迎えました。剣花坊は『川柳人』200号記念号の「巻頭言」で次のように述

分け的な存在で『川柳人』（200号）に「川柳と女性に就いて」と題して次のような川柳ジェンダー論を展開しました。

すべての文芸に女性は男性に抑へられておるが、柳壇に在つては、殊にそれが甚しい。近頃吾が新興柳壇にも、女性の作家が殖えつゝあるのは、真に頼もしく思はれる。然しまだその量に於いて、大海の一滴にすぎず、質に於いても男子の優れた新人に比較し、その歩調も遅れ勝ちであることを思ふと、窃かに肩身の狭さを感じられる。猶ほ明日の女性達の奮起を期待してゐる。

この「川柳と女性に就いて」の中で、井上信子は川柳界で初めて女性の立場からジェンダー平等を唱えています。

ここで信子が「新興川柳」と言っているのは大正末期から昭和初期に興った「新興川柳」をさしています。この「新興川柳」は剣花坊の支持を得て柳壇に大きな刺激を与えました。

しかし「新興川柳」は「生命主義」に立脚

V 剣花坊の「プロレタリア・ポエム」

昭和初期に剣花坊は「古川柳」の「うがち」（アイロニー）の精神と「新川柳」の「詩情」（ポエジー）を融合した次のような「無産派川柳」を根本に置いた「プロレタリア・ポエム」を発表します。

突き進むにぎりごぶしへ当たる風

この「プロレタリア・ポエム」には「冷刺的洞察」（うがち）と「熱愛的共感」（詩情）の両面が表現されています。

この時期に剣花坊は「川柳はプロレタリア・ポエム」であり、日本の「民衆芸術」の「短詩」であるという視座で機関誌に作品を

『川柳人』は、たとへ剣花坊がこの世に居なくなつても、三百号、四百号、九百号、

一千号に至つて亡びることは無からうと思ふ。さうして川柳現実主義の目的は終に貫かれる日があるだらうと思ふ。

かの神秘主義者の所謂茫漠たる生命で無く、唯物史観の上に打ち立つた科学的精神、合理的生命が、わが川柳詩を以て、人間の芸術を統一する時代も来るだらうことを信じて疑は無いのである。

VI 井上信子の川柳ジェンダー論

剣花坊のパートナーである井上信子（1869・1958）は女性川柳作家の草

した芸術性のある「川柳」を目指す「詩性川柳派」と、もう一方の「マルクス主義」に立脚した社会性のある「川柳」を目指す「プロレタリア川柳派」とに分かれ、それぞれの主張を展開していきました。

信子がこの文章の中で「男子の優れた新人」と言っているのは「川柳界の小林多喜二」といわれる鶴彬をさしていると考えられます。

信子の「川柳と女性に就いて」では明治時代から昭和初期に登場した女性川柳作家たちを取り上げ、最後に次のように述べ、この一文を終えています。

昭和四年には、市来てる子、井上鶴子、近藤十四子の諸氏を得ることが出来た。何れも新人とはいへ既に各自の個性を示されてゐるやうに思ふ。
以上が新川柳興隆に伴ふ、女性作家進出の概観である。

VII 柳樽寺川柳会の女性川柳作家たち

『川柳人』の200号には次のような女性

川柳作家の作品が掲載されています。

東京 市来てる

ウインドに虐げられし血が盛られ

ダンスアと利潤を両の肩にかけ

エロチックだけがレディのいのちなり

東京 井上鶴子

うぬぼれのくづれる音を聞くばかり

並びゆく君ある方のほてりかな

面伏せて肩をすぼめて通る意志

東京 近藤 十四子

底の無い悩みを神に責めたて、

知ることの寂しさ今日も本を読み

沈黙の骸は過去に閉じこめて

市来てるは本名・勝目テル（1894-

1984）。テルは消費者組合運動の活動家

として知られ、婦人運動にも携わっていました。

剣花坊と信子はテルの紹介で城西消費組

合に入会します。テルは井上信子の主宰する

「川柳女性の会」にも参加し、自ら「プロレ

タリア川柳の会」も作りました。テルの夫・

示野吉三郎は鶴彬と同郷の友で鶴彬はよく高

円寺の勝目テル宅を訪れ、「プロレタリア川柳」について語ったといえますからテルの「プロレタリア川柳」は鶴彬の影響を受けていると考えられます。

井上鶴子（1907-1999）は剣花坊・信子の次女で1928（昭和3）年に実践女子学校専門部を卒業。鶴子はこの頃、親類の大学生と恋愛関係にありました。発表された鶴子の「川柳」には女性の恋愛感情がよく表現されています。1931（昭和6）年に大石恭雄と結婚し、大石鶴子となり、三男一女の母となります。

VIII 女性川柳作家・近藤十四子の軌跡

近藤十四子は本名・千葉富貴子。（旧姓・近藤）1915（大正4）年3月30日、東京生まれ。川柳号の「十四子」は当時、近藤が十四歳の少女であったことを暗示しています。

中島國夫（1899-1970）は『川柳人』の編集後記で「恐らく全国作家中の最年少者だろうと思われる一少女だ」と記しています。

また大石鶴子は「柳樽寺川柳会の同人で『川柳人』の編集に参加していた中島國夫の勤める陸軍技術部本部に十四子も働いていたつながりで『女性川柳の会』に参加することになった」と語っています。

「女性川柳の会」は井上信子を中心とする柳樽寺川柳会の女性作家たちの集団で、遅くとも1929年の11月には結成されていたと考えられます。この「女性川柳の会」の結成を最初に告げたのは1929年12月1日に発行された『川柳人』（12月号）です。

1930（昭和5）年一月の『川柳人』の「新年広告」には「川柳女性の会」のメンバーが15名記されていますが、近藤十四子の名もそこにあります。

同年6月から12月にかけて十四子は次のような川柳を『川柳人』に発表しています。

溢れ出るものを抱いて坐す緑
虫ばまれながら咲かずに居れぬ花
水水とひでりにあえぐ草の声
歩いても走っても地球の上
淋しげにほゝえんでいる影法師
あえぎつゝたどりつけば断崖

雲低く垂れて大地の息づかい
稲妻となって雲間を突っばしる

十四子の母は1929年5月、通りすがりの男に襲われ、殺害されました。十四子、14歳の時に一家離散。十四子は生活苦のどん底で川柳と出合います。後年、十四子はこの頃を振り返り、「四方絶壁の峰に囲まれた谷底で悶えている骨と皮の『生きる屍』だったと回想しています。

1931（昭和6）年には『女人芸術』（10月号・11月号）の井上信子選による「新興川柳」欄に次のような川柳を投稿しています。

血みどろの手がアジビラを撒いてゆく
公然の秘密人間屠殺業

1931年を境に十四子は次第に「内なる自己凝視」から「外なる社会」へ目を向けるようになります。

1931年の『女人芸術』（9月号）の付録にエスペラント講座が連載されていたことからエスペラント学習を始め、直ちに「プロレタリアエスペラント連盟」（PEU）に加

盟します。その後、すぐに非合法の労働運動に転じました。

1932（昭和7）年には全協系の日本繊維労働組合に加入し、陸軍千住製絨所の臨時工となり、ビラ撒きを行い、それが原因で南千住署に19日間拘留。この時、特高に「全裸にされ、逆さに吊るされて足を左右にエイツと引っ張られた」という残忍な拷問を受けたことが十四子の娘の千葉敦子の著書『死への準備日記』（朝日新聞社）に書き留められています。この時、十四子は17歳の少女でした。（続く）

お詫び

「はばたき」44号に掲載されている平川柳先生の論文「十七音の川柳で戦争に抗し、平和を訴えた川柳作家たち」に、次の2つの訂正箇所がございます。

- ・17頁下段 後ろから5行目
×で新題柳樽」↓○で「新題柳樽」
- ・19頁下段「平川柳プロフィール」の主著
×『来迎神事典』↓○『来訪神事典』

平川柳先生には謹んでお詫び申し上げます。

読書リレー (第九回)

武田裕一

1 100分de名著

『中江兆民 三酔人経綸問答』

さんすいじんけいりんもんどう

(平田 オリザ NHK出版)

以下()の小題は私がつけたものです。
また(＊)は私の注です。

(あらまし)

(P 21)

私(＊平田)なりに定義すると、会話は「親しい人同士のおしゃべり」、対話は「異なる価値観を持った人とのすり合わせ」です。

この定義に当てはめると、『三酔人経綸問答』で行われていることは、まさに対話です。紳士君(＊洋学博士)は理想主義者、豪傑君は侵略を好む覇権主義者、南海先生はその中間を行く現実主義者。異なる価値観を持つ者同士が話し合っています。

(予言の書)

(P 26)

『三酔人経綸問答』を読んで私たちが驚かされるのは、この本がその後の日本についての予言の書にもなっているという点です。兆民は未来予想の本を書いたわけではありません

ん。しかし、現代の私たちが読むと、彼の記述のとおりとその後の日本が進んでいったことに、驚きを禁じ得ないのです。

(非武装中立―洋学紳士の主張)

(P 29・30)

洋学紳士は、民主制を実現しつつも軍備を増強し、他国を侵略しているヨーロッパを批判しています。その欧州に対し、日本がとるべき道を彼は次のように語ります。

われわれは文明の進歩に後れをとった一小国でありながら、頭をあげてアジアの片隅にすくと立ち上がり、一躍、自由、友愛の境地に跳びこむのです。要塞をとりこわして平地にし、大砲を鑄つづして戦艦を商船に変え、兵隊は市民となつて、ひたすら道徳を研鑽し、工業技術の開発に努め、純然たる哲学の申し子となつたとあつては、文明をもつて自ら傲るヨーロッパ諸国の人々も、深く恥じるるのではないでしょうか。彼らが頑になお改めず、はじらいもなく、こちらの軍備の撤廃につけり強引に攻め込んできたとき、われわれはみな、わずかの武器も一発の弾も持たずに礼儀正しく迎えたなら、いったい彼らに何ができるでしょうか。

洋学紳士が説くのは、現代の安全保障の言葉で言えば「非武装中立論」です。民主制を広め、軽武装どころではなく「非武装」を貫くことによって、世界から信頼される国になる。

(P 33)

日本の軍備撤廃をいいことに他国が攻めて

きたらどうするのかと豪傑君に問われた洋学紳士は、こう答えています。

ぼくはそのような凶暴な国はけつしてないことを知っています。もし万が一そのような国があつたとしても、われわれはそれぞれ自分で対処するだけです。願わくは、一ふりの剣も一発の弾丸もたずさえず、われわれはしづかにこう言いましょう。あなたがたに無礼をはたらいたことはない。幸い非難される理由もない。われわれはみなともに政治にたずさわり、争いも、いさかいもしなかった。あなたがたがやって来て、われわれの国を乱すことを望まない。一刻も早く立ち去つて、国に帰りなさい、と。

こう言われて素直に立ち去る軍隊などあるのだろうか、と現代の読者は思うことでしょう。さらに洋学紳士は、それでも立ち去らないなら、「あとは、弾を受けて死ぬだけのこと。別に秘策もなしに」と言います。道徳を貫くことが何よりも大事なのであり、攻められたらそれまでだ、というのです。

(中略)『三酔人経綸問答』が書かれたのは一八八七年です。まだ日清戦争(＊一八九四年)は起きていません。つまり、日本がまだ国民国家としての戦争を体験していない時点で書かれている。そのため、洋学紳士も豪傑君も、本当の戦争がどのくらい大変なものなのか、実感としてはわかっていないのです。

(中国を侵攻せよ―豪傑君の主張)

(P 44・45)

彼らを集めて、戦争に駆り出すのです。彼ら古いもの好き(＊それまでの制度や

意識に固執する)は、政府につらなる者も民間に暮らす者も、誰もが平和に嫌気がさし、何ごとも起こらない時代に自分をもてあまし、手足がうずうずしているという状態なのです。国家がもし宣戦布告をして、戦争に突入するとすれば、二、三十万の人々がたちどころに集結すること受けあいです。(ここで、洋学紳士をまつすぐに見すえて) ぼくのような者も、また社会の癩(が)です。自分を切除して、末ながく祖国に害を及ぼさないことを願うだけです。

(中略) 兆民も、古いもの好きに戦争をさせて癩を切るといのは「奇説」であると繰り返し書いています。しかし、その奇説であったはずのものが、昭和に入ると後付けで「正当」になっていき、満州国の建設という「理想」となって推し進められました。手品のよきな奇策がいつのまにか現実になる。これは歴史が教える怖いところですよ。

(メディアが恐怖を煽る―南海先生の主張)

(P 62 S 64)

国家がますます産物を増やし、物資が豊富になれば、国土が広く人口の多い中国は、じつにわが国の一大販路であり、つきることのない利益の源泉です。このことを考えずに、国の威信にかけてなどと言い、ささいな言葉のゆきちがいを目にして無益の争いをするようなことは、もつとも得策でないとなつたしは考えます。

(中略)

国と国とがうらみあうことになる原因は、たいてい事実にもとづくのではなく、風聞によるのです。事実を洞察すれば、少しも疑う余地はないが、風聞にかかると、なにやら恐るべきものが見えてくるのです。ですから、各国が疑いを抱くのは、各国の神経症によるのです。

(P 65・66)

さらに新聞が、それぞれの国の事実と風聞とを区別なく並べて報道し、それに自己の神経症の色彩を加えて一種異様な幻影で社会をおおいつくす。こうなれば、たがいに相手を恐れる二国の神経症はますますこうじて錯乱するに至り、先手をとれば勝てると思ひこみ、やられる前にやつてやろうと、開戦に至る。

『三酔人経綸問答』が刊行されてから七年後、兆民の予言どおり、日本は日清戦争で中国と開戦するに至ります。それに先立って、中国との対立を煽ることにつながる虚実入り混じった情報を、メディアが世間に拡散する役割を果たしていたことは間違いないでしょう。それはその後の日露戦争、太平洋戦争においてさらに過激なかたちで展開され、「事実と風聞とを区別なく並べて報道し」た結果、「一種異様な幻影」が社会を覆うという状況が起こりました。そしてこの指摘は、決して過去のものではなく、先に記したように、もちろん現代社会にも当てはまるのです。

(中略)

そして南海先生は、遠方への出兵は浪費であり、人々の負担が重くなるため、軍備は持

つとしても最低限とし、防衛に徹するべきだという見解を述べます。

2 『『コスタリカ「純粋な人生」と言いあう 平和・環境・人権の先進国』』

伊藤 千尋(ちひろ) 高文研

(洋学紳士と同じ答えの女子高生) (P 24)

軍隊がないことを国民はどう思っているのだろうか。地方の街を歩いていた時に向こうからかばんを下げた少女がやって来た。女子高校生だ。彼女に突然、質問した。「あなたの国に平和憲法があるのを知ってる?」。彼女は「もちろん知ってます」と答えた。私は「侵略されたらどうするの? あなたは殺されるかもしれない。それでもいいの?」と聞いた。彼女はすぐに「コスタリカはこれまで世界の平和のために尽くしてきました」と語った。過去30年間にわたってコスタリカが国際社会で平和のために何をしたらか、例を挙げてどうとうと述べた。そのうえで「この国が侵略されたら、世界が放っておかない」と断言した。さらに言った。「私は、歴代の政府が世界の平和のために尽くしてきたことを、一人の国民としてとても評価しています。私は、自分がコスタリカ人であることを誇りに思っています」

外国人の記者に道端でいきなり問われた高校生が、自分の国の憲法と平和政策について詳しく語り、自国を誇る。素晴らしいではない

いか。日本もこんな国でありたい。世界のすべての国がコストリカのようにであれば、世界平和は実現できる。彼女の笑顔と瞳を見つめながら私は心底、そう確信した。

(平和の出発点が個人)

(P5・6)

平和を考えると、日本ではすぐに国家や世界の平和を頭に浮かべがちだ。まるで自分が首相になったように国家管理を考える。コストリカはまったく違う。平和の出発点が個人だ。自分との平和、他人との平和、自然との平和、の三つの平和を幼稚園のときから教える。平和でまず大切なのは自分自身の平和をどう築くかで、自分が抱えている問題をポジティブに解決することがすべての平和の出発点だという。それを聞いただけでも、人生や社会への向き合い方が日本とは違うのがわかるだろう。

コストリカが優れているのは平和や教育だけではない。人権の面でも世界の最先端を行う。自分の人権が侵されたと思えば小学生でも憲法違反と訴える。人権と民主主義を小学校に入学した日から学び、どんなささいな人権違反も見逃さない。自分の人権だけでなく他人の人権にも敏感で、大勢の難民を受け入れてきた。これも日本とはまったく違う社会のあり方だ。

(民主主義の五要素を小学校から教える)

(P71)

「参加」「多様性」「寛容性」「対話」「連帯」の5枚のカードが、この順に入っている。これを民主主義の五つの要素と考えている。

なのだ。まずは話し合いに「参加」し、お互いに違う考え方を持っていて「多様性」があることを認識し、そのうえで自分と違う意見を嫌うのではなく受け入れる「寛容性」を持ち、自分の意見を言い相手の意見をしっかりと聴く「対話」を展開し、そこで合意、納得したことはいっしょに「連帯」して実行しているというのだ。

(対話の大切さ)

(P72)

「対話」のカードには、「対話は、暴力的な手段でなく他の人が考え主張する話を尊重し聞くことによつて、対人的な紛争を解決することができるようにする道です。対話では、自分自身を他の人々の立場に置き換え、理解し、尊重する能力が必要です」と書いてある。

① 100分de名著

『中江兆民 三酔人経綸問答』

(P22)

対論(ディベート)は、相手の主張を論駁(ろんぱく)することが目的ですから、どちらかが勝ち、どちらかが負けします。AとBが対論してAが勝つたのであれば、Aの考えはAのまま、Bの考えがAに変わります。BはAに屈服するわけです。

一方、対話においては、AもBも両方が変わることを前提とします。AもBも変わってCという新しい概念を生み出す。これが弁証法の考え方なのですが、日本人はこれが少し苦手です。「自分の思想を曲げることになら」と感じてしまう。しかし、対話の基本原

理というものは、異なる価値観を持った人と、互いの価値観をすり合わせたとき、自分が変わることを潔しとする。あるいは、ときには自分が変わっていくことに喜びさえ見出す。それが対話の精神なのです。

(日本への教訓)

(P6)

北欧の先進国ではなく、米国や西欧の経済大国でもなく、中南米の貧しい小さな開発途上国にどうしてこのような社会が実現できたのか。それを知ること競争社会、格差社会、さらに軍事国家となりかけている日本を立て直すヒントが得られるだろう。

(P209)

日本人は憲法という理想を簡単に捨ててはいないか。理想は夢の世界で、しょせんかなわぬものだときらめてはいないだろうか。目先の現実に目を奪われて理想を捨てるような人間は他人から信用されないだろう。国だって同じだ。理想を掲げて着実に進む国は美しい。そうでない国は、自ら破滅に向かうだろう。

(P212)

コストリカに学ぶことはまだまだ多い。平和憲法という共通点を基盤に、しっかりと連携して、世界の平和という目標のために進んでいこう。それが日本の、そして私たち一人ひとりのこの世の存在意義にもなる。コストリカに学んで日本をより良い社会に変え、コストリカとともに世界に平和を輸出しようではないか。

■宇部功先生はかつて何年にもわたって岩手県盛岡市からこの石川県かほく市高松の地にご足労いただき、高松小学校や大海小学校で高学年を対象に鶴彬の川柳について授業をしてくださいました。

令和五年度

令和六年三月一日

こどものころ五・七・五
年間賞

宇部 功 選

ヒマワリのようにまっすぐ生きていく

一本木中一年 山崎 美優花

見たいのはミサイルじゃなく青い空

附属中一年 折居 潤希

かきのへたみたら頭にしゅりけんが

玉山小四年 横場 清護

スキーの日雪がなくなりすべれない

六年 畑 中 遼

ままのかおはやくたべるといっている

城北小一年 きくち りん

川ぞいでゴロゴロしてる石のたび

三年 箱山 亜優実

ともだちのひかりのことばうれしいな

四年 高橋 遥

おやじギャグどんなはんのうしたらいい

四年 菅野 ことの

四季の花個性生かして咲いている

五年 千田 和佳名

能登半島風景変わり天あおぐ

五年 高橋 歩叶

父さんと母さんけんか部屋を去る

六年 神部 実咲

ふきの葉でわき水飲んでいい気分

晴山小四年 畑 中 佳紡

この本で私の未来かわったよ

四年 斉藤 乃愛

ひな鳥を守る母さん命がけ

五年 古館 陽和

魔女になり一度は飛ぶぞ夏の空

河北小五年 高田 麻央

困ったら頼っていいよいつでもね

六年 金 愛実

回転ずし川のように流れてる

角浜小六年 北沢 蘭

リラックスしたいときには川を見る

一本木小五年 山崎 正継

あめになりかわがあふれてへびのよう

城南小一年 川村 はる

きらきらと光っていたよ六年生

山根小六年 倉口 芽依

土曜日は羽生えたよう軽くなる

米内小六年 高橋 宙己

言葉では伝えきれずに手をにぎる

柳沢小六年 岩崎 風乃

あせかいてひんやりスイカがぶりつく

六年 高橋 幸花

大きな手でつかみとりたい夢ひとつ

山形小六年 西 天音

ほしがきのカーテンくぐり祖母の家

六年 下館 百望

お母さん怒ると目立つバラのトゲ

生出小六年 櫻 侑磨

レポート

被災地の炊き出しに参加して

顕彰会事務局 遠田 勝良

今年の1月1日4時10分能登半島を震度7の地震が襲った。普段の能登ならば風光明媚でのんびりした過疎地だが、お正月とお祭り



梶・波志借集会所でのラーメンの炊き出し。右端は遠田勝良さん。

のある時期だけは県外から故郷に帰って来る人でいっぺんに賑やかになる。

少なくともそうした風景は元旦の4時9分まではいつもの通りだった。しかしその1分後にあのとてつもない大地震が直撃するとは誰が予想したことだろう。

地震発生から連日生々しい被災地の様子が報道され続けている。地震国日本においてはここが安全・安心という場所がないということをもたもや見せつけられた思いがした。被災された80歳代の老人がテレビのインタビューに「今までここで生きて来たけれど、こんな大きい地震は初めてや」と崩れた家の前で首を落としていたのが忘れられない。

報道によれば地震の規模の大きさが徐々に解って来ている。当初は能登半島だけが焦点になっていたけれど、富山や新潟にまで多大な影響が出ているとの情報。被災されている方々が多方面にわたっていることに驚く。

さて能登半島地震による石川県の主な被害状況は次の通り。(ただしこれは震災4カ月後の5月1日現時点での県発表のもの)

死者245名 家屋被害(全壊半壊等)

78,557棟 断水3,780戸 避難者1

次2,420人 2次1,922人 道路に関

しては主要な基幹道路の通行が何とか可能になって来たが一本脇道に入るとどこも「通行止め」の看板だらけ。残念ながら足元の復旧も遅遅として進んではないのが現状だ。

震災から4カ月経ってあちこちから聞こえ

るようになった「復旧・復興」の遅さの問題を探って行くと、地形学的な点を隠れ蓑にして過疎化する地方の一層の過疎化をねらう政権政治の意図が見え隠れする。つまりは「いざれ過疎化で消えていく地域に金などつぎ込むのは無駄」と言うわけか。その出し渋りが今の姿だとしたら決して許せるものではない。昔から「能登はやさしや土までも」と言われて来たように、能登の人のこころの温かさを知らない人はいない。でも私の眼からは震災後「能登はかなしや土までも」と映るようになってきている。先日炊き出しのお手伝いに参加して更にその思いを強くした。

4月24日と25日に次の地域で炊き出しが行われた。炊き出しは茨城から来るキッチンカーで能登には今回で3度目とのこと。このキッチンカーは東日本大震災の時からフル活動をしている優れもので、熊本の震災にも出かけていたと聞いている。当初は浄土真宗東本願寺の支援で有志の若い僧侶が立ち上がりやりだしたものが、その後NPO法人化して現在に至っていると教えて頂いた。

24日の炊き出しは(夕食)穴水地区の「梶・波志借集会所」。朝から天候不順で夕方には雨の予報も出ていたが、鶴彬を顕彰する会から浄専寺住職で事務局長の平野喜之さんと私遠田が参加した。場所的には穴水から珠洲に向かう道路のトンネルを過ぎて一本横に入った限界集落に近いお年寄りばかりの所とお見受けした。



梶・波志借集会所の中で、鍋を囲んで歓談中。

平野さんと私は午後1時にかほく市の高松を出発し七尾の教務所に立ち寄った後現地に着いたのは午後4時ごろ。でもまだ茨城からのキッチンカーは来ていなかった。そこで集会所で寝泊まりしている方々と少し現在の暮らしなどについてお話が出来た。それによれば「今月中には仮設住宅に入れるので集会所での生活は終わります」とのこと。「でも家は

そのまま手がついていません」と辛い胸の内を語られていた。

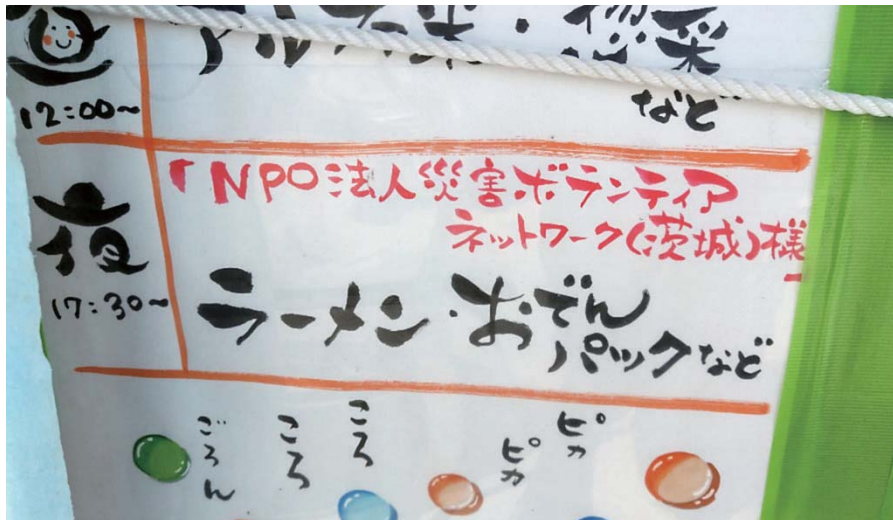
4時過ぎにキッチンカー到着。茨城から8時間かけての長旅。すぐに準備にかかる。すでに富山や小松からもボランティアの若い僧侶さんたちが5〜6人集合していたので手際よく準備が進められた。また集落の役員だけでなく住民も三々五々集まり出して皆さん和気あいあいと準備を手伝っておられた。炊き出しメニューはおでんとラーメン。おでんは集会所広間のテーブルに設定された5台のカセットコンロで。ラーメンはキッチンカーでつくられ皆さんの手へ。5時30分から開始されたテントのしずくにラーメンの係はてんやわんやの一幕もあった。それでもここは2度目の炊き出しと言うこともあり7時ごろまでには無事終わることが出来た。8時の撤収では集会所の玄関先でお互いに笑顔でそれぞれの健康と無事をエールしあった。平野さんと私が帰宅したのは10時だった。

25日の炊き出しは輪島市門前の「皆月多目的集会所」（昼食）と同市門前町の「門前町諸岡公民館」（夕食）の2か所。昨日と違い気持ちのいい晴天になった。平野さんと私は朝7時に高松出発。事前の情報によれば門前町皆月地区への道路はまだ良くないと聞いていたが、取りあえずカーナビを利用して行くことに。海浜道路は羽咋辺りからのろのろに巻き込まれたが、西山から一般道路に入ると

スムーズになった。しかし道路があちこち修理中で富来を過ぎる頃から極端に悪くなったのを実感した。つまり道が平らでない上につきはぎだらけのがたがた道といった状態が続き出したのだ。それだけには終わらず今度は車の前に現れたのは地震をもろに受けた集落の無残な姿だった。どの家とて被害のない家はないほどの痛ましきである。更に海の様子も一変した。まざまざと海岸の隆起を眼にした時「これは海の墓場だ」と叫びたい衝動にかられた。まさに異様としか言いようのない情景が海岸線を形成していたからだ。小さな漁港はコンクリート剥き出しの哀れな姿を晒し、船影などはどこにもなかった。

私たちはカーナビの指示に従い深見経由で山越えの近道を選択してみたが、やはり途中で「通行止め」の看板。それではとまた本線に戻って昔からのルートを取ったもの。ここも入口にあたる場所で看板。思案に暮れて地元の人に聞くしかないと思っていた矢先、運よく郷土史料館の案内板を見つけてそこに飛び込み、やっと一本だけしかない「おさよトンネル道路」（これは私たちだけの名称）を聞きあて、やっと皆月へ辿り着いたのだ。

時計を見ると10時を過ぎていた。皆月と言えば、石川県人なら良く知っている猿山の「ゆきわり草」群生地場所。今も地域住民が中心に大切に守り続けている。でもそこが今回の地震により、まるで陸の孤島になって



諸岡公民館に貼ってあった、炊き出しの予定が書かれたポスター。



キッチンカーでラーメンを作る準備をしている
梁河文昌さん（NPO法人ボランティアネットワーク代表）

いたとは思ってもよらなかった。

海岸のそばに建つ「皆月多目的集会所」にはもう幾人かの役員や女性たちが炊き出しのため動き回っていた。周囲の悲惨な様子とは裏腹に明るい笑いが飛び交っていた。そのうち今日お手伝いに入ってくれる僧侶さんも集まってきた。キッチンカーがやって来たのは11時ごろだった。早速昼食のラーメン提供の準備に入る。すると案内が回っていたらしく、どんどん人が集まり出した。集会所で食べる

人、家族の分も持つて帰る人で行列が出来て大忙し。

いつの間にかおにぎりの用意もされていた。150食が1時間で終了した。浜風が少しあったが天気がよくてこんな炊き出しなら苦にならないなと思った。ここでも別れる時はいい笑顔、その笑顔に「負けないで！」と何度心の中で言ったことか。

休憩を取り皆月出発は3時。次の「門前町諸岡公民館」へ。有名な古舍利総持寺から近い集落の小高いところに公民館があった。

来て見て驚いたのは未だに断水が続いていること、公民館に30名の人が避難生活を余儀なくされていることだった。聞けばこの地域一帯も酷い被害を受けていてほとんどまだ手つかずのまま放置されている状態だと言ふ。公民館はそうした地域の中心になって積極的に炊き出しなどの活動を行っているらしく、掲示板には日々のスケジュールや企画など

のお知らせが貼られていた。

公民館の空き地スペースには大型の水のタンクや男女別テントの風呂場また数台の洗濯機も併設され生活実感がありありと伺えた。

4時半ごろキッチンカー到着。夕食の準備開始。ここでは何とバーベキューとラーメン（150食）炊き立てご飯の提供と言う大盤振る舞い？だけでなくビールなどの飲み物まで用意されたのに肝を抜かれた。また3台の即席テーブルも設置、そこに顔見知りが集まりわいわいがやがやとまるで避難所というイメージを感じさせない空間を醸し出していた。この時間帯がもっとも忙しく息つく暇もなかったはずなのに、何故か言い知れない充実感に満たされていたのは不思議な体験だった。それは私がここでまた溢れる笑顔の花が咲いているのを見たからだと思う。支え合う所に絶望などありえないのだから。かつて学生時代に歌ったあの「がんばろう」が胸の底から湧き上がって来るのがわかった。私たちが帰路に就いたのが8時。恐ろしい悪路の夜を走って家に着いたのは昨日と同じ10時。夜空に星が輝いていた。最後になりましたが、キッチンカーの梁河文昌さん、企画運営トップの見義智証さん、お二人には特に敬意を申し上げます。みなさんお疲れ様でした。

川柳 炊き出しに心開いて見るあした

亀公子

「鶴彬・交流の広場」

三浦主税さん（「鶴彬を顕彰する会」元会
員）の一周会法要に集った方々を、鶴彬資料
室にご案内した報告記

浄専寺前住職 顕彰会事務局 平野 道雄



羽田克明（右から3番目）・真理子さん（左から2番目）ご夫妻とご家族。

2024年2月4日に愛知県美浜町より羽田克明・真理子さんご夫妻とそのご家族

が、真理子さんの兄三浦主税さん（「鶴彬を顕彰する会」元会員）の一周会法要が浄専寺で勤められ、それに出席されました。その翌日に、兄から鶴彬について色々聞くことがありましたが、私たちもこの機会に学んできたい、とのことで訪ねてこられたのでした。

私が三浦さんと親しくさせていただいたのは、鶴彬の映画作りの前に浄専寺の「生きることを学ぶ会」の講師に神山征二郎監督に来ていただき、満堂の中で「わが映画人生―感動を伝えたい」の講題で講演していただきました。終了後、監督を囲んで軽く飲みながら、座談会を持ちました。三浦さんも監督の話に感動されたのか、その場にも残っていたのでした。三浦さんはアルコールも大好きな方でした。私も体に少し合うほうなので時々居酒屋でお会いするようになったのでした。

また「生きることを学ぶ会」では、年に一回は平和をテーマにした曲を歌っている方に来ていただいているのです。横井久美子、野

田淳子、豊田勇造などのライブに参加してくださいました。

三浦さんの学生時代は、大学に正義が貫かれていないということで純粋な若者たちが抗議の声をあげ、学園紛争が起こった時代でした。三浦さんも運動に参加され、社会人になってからも、その純な思いが濁らなかつたようで、居酒屋の止まり木では、杯を重ねるほどに、政治屋の不正義な発言や政治リダーが「右向け右」と号令をかけ、「壊憲」に向かって進もうとしていることには、ボリュームを上げて批判された。また、過ちを二度と繰り返してはならないこと、昭和史の教訓を学ばなければと、かみしめるように語るのでした。私は自立した姿勢をもっているのかと問われているようで、酔いがさめるような思いをしたものです。

本堂で羽田さん家族に、私たちは現代社会の状況から問われていることが沢山ありますから、今、私たちが鶴彬から何を学ばなければならぬのか。そのことを心に置きお話しさせていただきました。

政治に今、必要なことは、国民の恐怖心を煽り、九条を殺し、戦争のできる国への歩み

を進めることなく、鶴が願っていたこと、それは、戦争する虚しさ、愚かさを経験した国としての平和外交に全力投球してほしい。ということ。釈迦の教えも殺される恐怖を自分の身に置いて受け止めるならば、**殺してはならぬ、殺さしめてはならぬ**（法句経）と説いています。非戦は自分の問題であり、平和運動に対して確りとしたアンテナを立てておかねば―と。

鶴彬には、国策に同調しない句や評論が多くあります。労働者の怒りや社会の弱者の悲しみ、苦しみを代弁して吐いた句が多いので、資料室で紹介することにしました。

それから浄専寺の境内に最後の句である**胎内の動き知るころ骨がつき**の句碑を建立したことに触れておきました。

国内の戦争一色に染まっていた状況の中で、鶴彬は非戦の態度を曲げることなく、29歳で牢獄で斃れていきました。その生涯に比して、仏教会は、国策に丸め込まれてしまいました。そこに仏教者の戦争責任があります。今、真宗教団に身を置く私にも責任があります。そのことを神山監督にお話をし、選句し、揮毫していただきました。除幕

式で作家の澤地久枝さんは**故郷に決して受け入れられなかつた**だろう鶴が百年の月日を終えて戻り、喜んでいるのではないか”**身ごもった赤ちゃんの胎動がわかつて生まれてくる日を予告していた**というのに、父親は戦死してその遺骨が届く。子は父を失い、母は夫を失う。戦争をみごとに突いた句です。最後まで反戦の筋を通して死んでいきました。ずいぶん痛ましい、しかもみごとな人生だと思えます。”とあいさつされました。私はこの句碑の前に身をすえ、鶴彬が願った世界を私は願っているのかと、問うていかねば―と。

最後に**ひとすじの道―つるあきらに寄せ**て―」（作詞 佐伯洋。作曲 Kei.Sugar）をギターで弾き語りで歌いました。（三浦さんは数年前より左手の指の麻痺のため、演奏が上手くできないので、小生には不相応の高価なギターをプレゼントしてくださいました。）

ひとすじの道

―つる あきらに寄せて―

1. 闇があかつきへと時を刻む

今もひとすじの道が朝の光をあびる

”手と足をもいだ丸太にしてかへし”
ゆるがぬ言葉の結晶

ひとすじの道を歩みつづけたあなた

2. 冬が春風をいざないながら

いつかひとすじの道に

春の光よとどけ

”枯れ芝よ団結をして春を待つ”

バネのような鋼鉄の告発

ひとすじの道を歩みつづけた あきら

3. なんと美しい朝焼けだろう

今日もひとすじの道が

明日の時代を呼ぶよ

”暁をいだいて闇にある蕾”

苦しみをはねかえすねがい

ひとすじの道を歩みつづける

わたし

ああ”胎内の動き知るころ骨がつき”

愛と怒り

いのちと平和

ひとすじの道を

わたしもあなたも歩む

時代を歩む 明日へ歩む

次に近くの喜多家に案内しました。喜多義

教さん（鶴彬を顕彰する会事務局・鶴彬の甥）の前庭にある句碑 “可憐なる母は私を生みました” は、やはり映画作りの時に監督に選句、揮毫していただきました。父が32歳（鶴の8歳の時）で病死され、母は45歳で再婚され、長女を連れて上京されました。“可憐なる” というのは、“かわいそうな母” という意味で読んだほうがいいと、川柳の先生方のアドバイスでした。句碑建立が遅れましたのは、長く町民の間には “国家に背き国に仇した罪人” というイメージが払拭されず、鶴彬を受け入れがたい空気があったことです。また遺族や知人の間にも、この “負い目” が温存されていて、それから解放されるのに、時間が必要だったことかと憶測することです。

喜多家と浄専寺の中間に「たかまつまちかど交流館」があり、その3階に「鶴彬資料室」があります。1階にある喫茶店でお茶に来ておられた鶴彬の姪御さんの城戸寿子さん（鶴彬を顕彰する会の幹事）にお会いするところができて、みんなでごあいさつさせていただき、資料室にありがとうございました。

貴重な資料が多数展示されてあることに喜

ばれ、時間をかけて閲覧されておられました。映画製作の時のスナップ写真のコーナーでは、神山監督をはじめとして、脚本家の加藤伸代さん、俳優さん、スタッフの方、地元ボランティア・スタッフの面々に大変苦労をかけた事をお話しさせていただきました。監督は30本ほど映画を作っておられますが、大きい仕事は何億とかかり、スタッフも50人〜70人が必要だそうです。

鶴彬の映画は、予算2、500万でお願いしましたので、少数精鋭の10人ぐらいしかスタッフを組めず、一人で何役もこなしておられました。撮影には、戦前を再現する大道具、小道具、明治時代から昭和に建てられた民家、小学校の教室、古い織機が稼働している工場。70年前の留置場が残っている福井県までもロケ隊は走ったことでした。短時間で語り尽せない、苦労の重なることでした。

俳優さんやカメラマンの方は高松の迎賓館？河北亭で、監督は一か月近くを浄専寺の宿坊で我慢されたことでした。

監督はロケ現場やスタッフ本部では、怖くて気難しいように見えました。帰られて、浄専寺温泉からあがられ、止まり木でア

ルコール点滴を受けられますと、冗舌になり、熱く語られました。時には “あなたは今、どう生きようとしているのですか” と問われているようにも思い、私のほうは、点滴の効果が半減した夜もありました。

お開きが遅くなられても、翌日の撮影の準備をされておられたのか、机の明かりが点いていました。監督の頑健なお体には感服したことでした。

撮影がゴールにたどり着いてからは、監督は “こんな厳しい映画作りは経験がないことです” と語られながら、“生涯で一番忘れたい仕事だったかもしれない。小さいけれど大きな仕事でした” と語られた。監督は “鶴という人はピュアで愛の人” なんですよね、と語られたことがありましたが、神山監督もまた “ピュアで愛の人” でした。

最後に、鶴彬の力強い生き方を真似ることはできないが、鶴の願った世界を私たちもまた願うことが大切なことではないかと、共に確認しあい、鶴彬生誕100周年記念作品ドキュメンタリードラマ『鶴彬 ころの軌跡』のDVDをプレゼントさせていただきました。お別れをしたことです。

第12回鶴彬のふるさと

「高松歴史街道フェスティバル」

会場／高松産業文化センター大ホール

1 9月14日(土)

●第7回「墓碑法要の集い」

- ・開会・午前10時〜 閉会10時30分
- ・会場／浄専寺

●第26回鶴彬をたたえる集い「碑前祭」

- ・開会・11時〜 閉会11時30分
- ・会場／高松歴史公園

2 9月15日(日)午後2時〜5時

●第11回「鶴彬」かほく市民川柳祭

●第29回 鶴彬川柳大賞

- ・入賞・入選作品はフェスティバル会場に鶴彬の句と共に行灯で展示。
- ・かほく市民川柳祭の表彰式は午後2時より大ホールで行われる。

※鶴彬川柳大賞については投句者全員に、後日入賞、入選作品の発表誌を送付する。

◆能登半島地震とダキシメルオモイ展

3 9月16日(月)

●「ダキシメルオモイプロジェクト」

画家 小林憲明さんのお話

午後1時〜2時

小林憲明さんをお交えての座談会

午後2時10分〜4時

編集後記

鶴彬を顕彰する会事務局 平野 喜之

能登半島地震から半年が過ぎようとしています。テレビではほとんど報道されなくなりましたが、復興へはまだまだ遠い道のりです。

この度は、鶴彬を顕彰する会のことを心配して下さった全国の方々から、安否を気遣うご連絡やお見舞金をいただきました。昨年の高松歴史街道フェスティバルに出品して下さった香川県丸亀市の大西康彦様(彫刻)と樋笠幸彦様(書)から多額の御見舞金をいただきました。その他お見舞いをいただいたのは、あかつき川柳会、眞鍋恵子様、木村悟様、勝村誠様です。誠に有難うございました。

かほく市も地域によっては大変な被害を受けていますが、鶴彬の生家や資料室がある高松では断水も停電もなく、会のメンバーもそれほど大きな被害を受けた人はございません。皆様には大変ご心配をおかけして申し訳ございませんでした。皆様からいただきました見舞金はすべて本号14頁〜16頁の遠田氏のレポート「被災地の炊き出しに参加して」で紹介されているNPO法人ボランティアネットワーク(梁河文昌代表)のクラウドファンディングに寄附し、顕彰会の事務局員はボランティアのキッチンカーと共に、これからも能登に炊き出しに参ります。鶴彬には遠く及びませんが、少しでも弱い立場に追い込まれた方たちに寄り添って生きたいと願っております。

鶴彬を顕彰する会



「はばたき」ダウンロード



問い合わせ先



鶴彬という人



■発行 鶴彬を顕彰する会

■事務局 〒929-1215

石川県かほく市高松ツ66 浄専寺 (平野喜之 気付)

TEL・FAX 076-281-0546

携帯TEL 090-8209-3679

■E-mail: yoshiyuki.h.1192@gmail.com

■ホームページ http://tsuruakira.jp/

◆会員募集◆(随時受付)

*年会費3,000円(団体3,000円)

3,000円には「鶴彬通信 はばたき」購読料含む

*「はばたき」購読のみの場合は2,000円/年

郵便振替口座 00740-5-75480

加入者名「鶴彬を顕彰する会」